



ツパマロスとのインタビュー 「都市ゲリラから大衆党へ…」

……しかし、軍部に対抗する準備は万端だ

ウルグアイの都市ゲリラ組織「ツパマロス」は、1985年以降、合法活動をおこなっている。以下のインタビューは、ツパマロス結成メンバーの1人でもある、E・F・ウイドブロとの会見である。

インタビューでは、ツパマロスの闘争の軌跡、現在のウルグアイ人民の中での大衆運動、90年代におけるラテン・アメリカ左翼運動の展望について語られている。

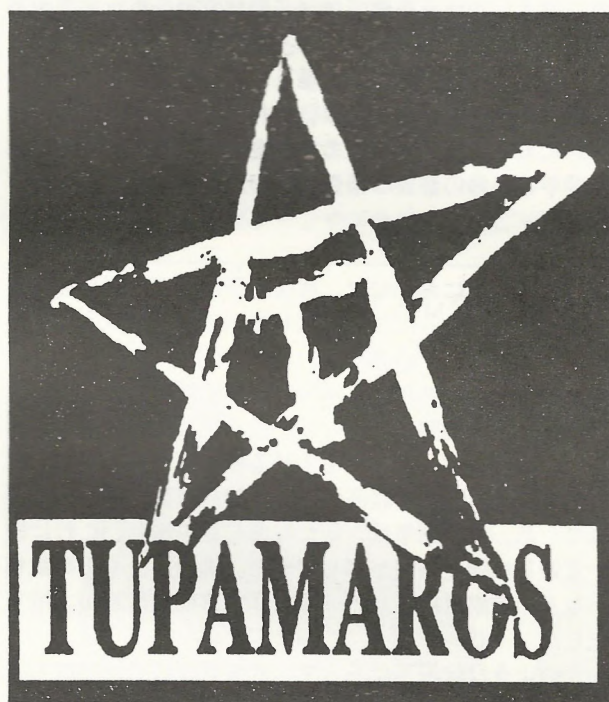
ウイドブロは、現在52才。スペインからの移民の子供として、モンテビデオに生まれる。1958年頃から政治運動に加わるようになり、当時の政府が発動した大学治安管理法への反対闘争に参加し、1962年、初めて逮捕される。のち数年にわたり農民連帯運動(MAC)や、左翼労働運動の支柱であった砂糖精製業労働組合(UTAA)で活動。

1965年、ラウル・センディックらと共に、民族解放運動(MLN)／ツパマロスを結成。翌年には、地下活動に移ることを余儀なくされ、地下都市ゲリラとして軍事活動を開始したが、1969年10月、治安当局により逮捕された。1971年9月、劇的な脱獄で逃亡に成功、自由の身となったものの、1年後、軍当局によって捕らえられる。ツパマロスが連絡拠点として使用していた住居が、軍隊によって急襲されたのであった。この時、ウイドブロは重傷を負っている。

1973年6月、ウルグアイで軍事クーデターが起こる数週間前に、獄中にあったツパマロスの中心メンバーらは「国家による人質」として厳戒監視体制の軍兵舎へと護送され、以後、11年半にわたり監禁された。

収容中は連日にわたって厳しい拷問がなされた。軍政に対する民衆の運動が高揚、拡大しはじめた時、「国家の人質」であった彼らは、1984年4月、分類隔離拘禁され、さらに別の監獄へと移送された。その名も「ラ・リベルタド」(＝自由)刑務所であった。

1985年3月の、いわゆる「民政移管」により釈放される。釈放当日、ウイドブロは「ツパマロス指導部」の名で「組織の新たな形態」として「合法政治運動を目指す」と宣言。現在は、雑誌「マテ・アマルゴ」を編集、発行し、現在もツパマロス指導部メンバーである。



〈今号の内容〉

★ツパマロス・インタビュー

「都市ゲリラから大衆党へ」

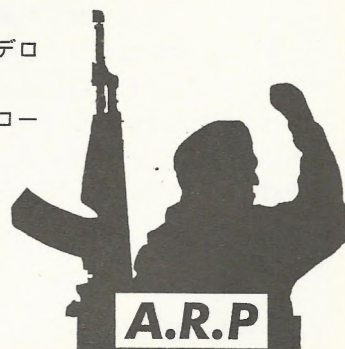
★フィリピン共産党中央委員会声明「新人民軍結成25周年を祝う」

★ペルー共産党／センデロ
・ルミノソ綱領

★IRAによるヒースロー
空港迫撃砲攻撃

★IRA
「イースター声明」

★マーク・ルディン
連帯行動



【Q】ツパマロスはそもそも、合法活動の分野から政治運動に加わるようになりましたが、合法活動を捨て、武装闘争を選択した理由は？

——我々は、合法闘争を捨てて、地下活動に移ったわけではない。自らの活動を軍事行動のみに限定したことはない。これがツパマロスの特色であった。ここが、ラテン・アメリカの他のゲリラ組織と違っていただけだ。

【Q】ウルグアイの他の左翼組織とは違い、ツパマロスは実際の活動を、まず軍事レベルから開始したようでしたが…。

——実際のところ、目指していたことは武装闘争を遂行することではなく、それを準備することだった。我々の政治分析によれば、ウルグアイは深刻な社会的構造的危機に瀕していたのは明らかだった。そしてこの状況は、必ずや暴力的な形で爆発するだろうと認識していた。これに備え、かかる事態では、必要な役割を担う必要があると考えた。この前段階にあって、不幸なことが起こった。多くの内紛が起こり、地下に潜らねばならない仲間たちもいた。我々指導部は、これらの不幸な出来事は、活動においては逆効果であると十分に認識していた。武装闘争のための必要な条件が、十分に整ってはいなかったのだ。

【Q】60年代においては、武装闘争にとって十分な条件が整っていなかった、と認識しているのですか？

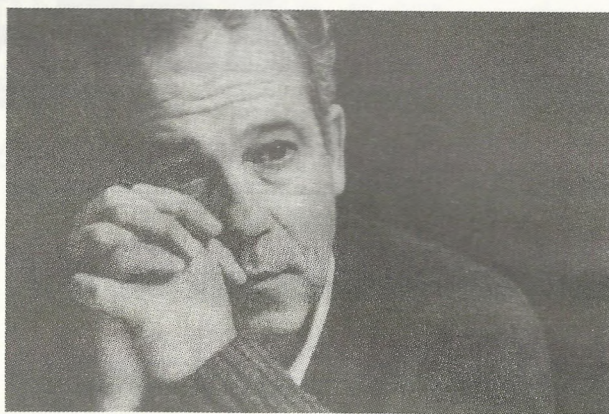
——もちろんその通りだ。我々の任務は準備することであり、それ以外にはなかった。1967年に起こった事態は以後急速に展開していった。ウルグアイ大統領が急死したのだ。彼は、すべてを牛耳る極右によって成功を収めた人物だ。瀕死の経済的、社会的危機状況は、一気に爆発した。階級闘争は、新たな激しさを増し、これに続いて厳しい弾圧の波が押し寄せた。国民議会や高等裁判所などの機能は停止し、「国家非常事態」体制が、恒常化した。

このような状況下において、武装闘争はこれに打ち勝つ唯一正当な手段であった。民衆の理解が得られるような軍事闘争の形態のみを選択したため、我々は合法的大衆闘争を支えることができた。

【Q】つまり、ツパマロスの武装闘争路線は、国家機関からの攻撃、蛮虐に対する「防衛」としてあったのですか？

——我々は、国家が我々の諸活動に対し行なったことに反撃した。わが国における最初の政治囚は、「国家非常事態」が宣言された際に逮捕された者たちであり、ツパマロスではなく、学生、政治家などであった。同様の悲劇が連続した。運動は、学生、労働者、政治家によって牽引されており、我々でさえその後続いた。我々は武装闘争を行なっている時でも、選挙での左翼共闘路線を支持していた。

【Q】軍事的暴力の行使について、例えばウルグアイ共



産党（PC）などのような、他の左翼はどういう立場でしたか？彼らはこういった闘いの方法とはってはいませんでしたね。

——共産党は、我々のような武装闘争路線をとりはしなかったが、彼らも同じような形で準備していたとは言えよう。

【Q】そのような準備は、実際になされたのですか？あるいは、話の上のことだけで終わったのでしょうか？

——準備は確かになされたようではあるが、その実際の行使への訓練を行なってはいなかった。これが、今日のウルグアイ共産党の大きな問題であろう。共産党は一度も武器をとったことはない。彼らはMLN／ツパマロスや、他の武装グループの武装闘争路線を敵視してはいなかったが、批判的な見方はしていた。多くの諸党派が、闘いに共感を寄せていたゆえに、共産党指導層と一般大衆の両者の間の政治的見解の違いをはっきりとさせるのは、重要なことである。

【Q】MLNは何を基本にして、運動基盤、議会、選挙、ゲリラ行動などの様々な戦術展開を整合しようとしたのでしょうか？

——各々のどの闘争形態も必要かつ重要なものであり、それぞれ個別の状況次第である、というのが我々の認識するところであった。時として、ある闘争形態が、他よりも重要である。すべてを完全に放棄してしまってはならない。各々の政治局面で、闘争の諸形態を用いるにあたっては、必ず分析を試みてきた。問題は、ツパマロスが、その「ゲリラ行動」によって、国際的にもあまりにも知られていたことであった。ウルグアイにやって来る外国の報道機関は、労働組合や学生についての記事を書くのか…、あるいはツパマロスの選挙戦術について報道するのか？

【Q】ツパマロスは政治状況への闘いに重点を置いた、ということでしたが、原理として、より重要な闘いの形態はあったのでしょうか？何が戦略的役割を担っていたと言うのでしょうか？大衆運動など、色々な領域がありますが…

——我々が軍事路線を選択するようになったのは、正

確にはいつだったかははっきりしないが、1969～70年頃だったと思う。我々は、これを我々自身の総括自己批判作業の中で決定した。MLNは最初から、軍事組織ではなかった。後の経験から、人民の支持を得るのが戦略的に重要であると学んだ。もしゲリラ運動が人民の共感を得られない中でなされるのであれば、それは政治にはなりえず、単に警察や治安当局との闘いとしての運動に結果することだろう。闘いは十分に鍛えぬかれた組織の、限られたメンバーの中から現出されねばならない。

【Q】ツパマロスの軍事方針とは、実際的にはどういったものだったのでしょうか？

—— この分析作業は継続してなされて来たのであるが、実際のところ軍事行動が必要だと結論を出したことに、人民からの抵抗感は感じられなかった。これらの行動の中には、意義を欠いていたものもあったし、逆効果を生んでしまったものさえあった。大衆運動が、強固になった時には、我々は政治活動にほとんど時間を費やすことをせず、十分な運動基盤で活動できてはいなかった。軍事的敗北を喫した、1972年の時点で、都市ゲリラ闘争はたとえそれが一定の獲得目標に到達してはいても、限界のあるものだということが明らかになった。

【Q】どういうことでしょうか？

—— すなわち、もし都市ゲリラが、ただ単に都市ゲリラ戦を鼓舞し続けるだけでなく、広範なレベルで大衆の支持を受けていたなら、大衆を無防備な形で、権力側の殺戮部隊やファシズムに向ける結果となってしまう。都市ゲリラが治安機関に対して攻撃を加える時、これは大衆が参加していないという事実を自明にする結果とさえなってしまった。軍事的にであれ、これは失敗であった。武装闘争が必要であり、ゲリラが大衆の支持を勝ちとった時、ゲリラは闘いの性格を変容させねばならないからだ。その時ゲリラには、自ら戦争を戦い、地域を解放するために、軍隊組織へと変容させる必要が生じてくる。これがニカラグアやエルサルバドルで起こったことである。彼らは、そもそも敗北から学んできたのだ。

【Q】つまりウルグアイは（権力との）いたちごっこのような状態が続いており、ゲリラ闘争が高揚すれば、大衆の圧倒的な支持も得られるということなののでしょうか？

—— その通りだ。特に重要な点は、敵が大衆運動に対し全面戦争でこれに臨むと決定したことだ。運動基盤を攻撃することで、ゲリラを狙い撃つことができると考えた敵勢力は、人民全体に全面攻撃を仕掛けた。

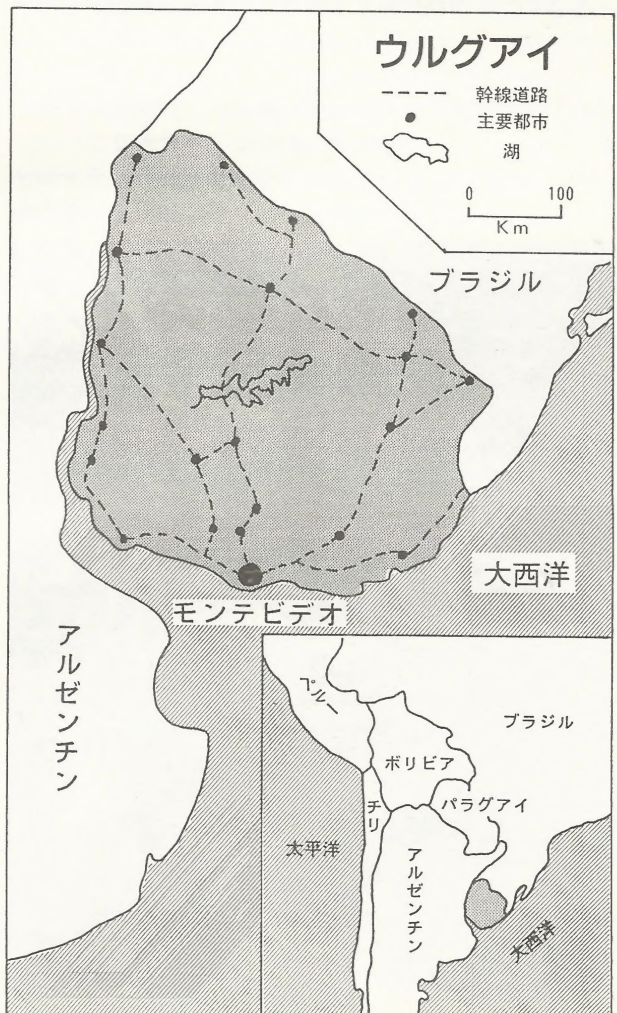
【Q】ツパマロスは戦略拠点づくりとして、地方へと闘争を移動させ、そこから都市の戦いを支援するといった戦略はとらなかったのですか？

—— 地方へとゲリラ闘争を移動させることは考えたことはあるが、そこを戦略拠点とすることは考えなかった。この国では、それは不可能であった。エルサルバドルで

は出来たかもしれないが、ウルグアイでは無理だった。この国は広大すぎる。そして平坦な土地でもある。まるで牛に埋めつくされたサッカー場のような場所だ。そんな所で戦略拠点づくりを進める方法はなかった。

【Q】ウルグアイ特有の事情を考慮すれば、人民戦争や蜂起戦略など、当時の中央アメリカで重要な位置を占めていた「政治／軍事」の思想のみに頼ることはできなかったのですね。

—— 私は、明確な組織体系に頼ったり、ステレオタイプの人間みtainな回答をするのは好きではない。今の質問については、若干の危険性を内包してきた問題でもあった。「政治／軍事」の思想とは、普遍的に何でも応用できるというものではない。企図したことが、成され得ない状況的制約の中での活動。これは常にツパマロスの組織的特徴でもあったことだ。ツパマロスが都市ゲリラ闘争を前進させた当時は、地方ゲリラ機構を基準としていた。ゲリラ闘争を展開しながらも、人民と共に活動し、選挙戦略を発展させることを止めはしなかった。当時のこれらの思考は、ひとりよがりであったかと思われる。しかし我々は、自らの意志により、また自らの具体的現実性の検証作業に基づいて、独自の戦略、戦術をうち固めた。とりわけアルゼンチンやブラジルで起こったこと



は、我々にとっては大きな教訓となった。

【Q】当時、軍隊や殺戮暗殺部隊は、人民大衆に対し、血の弾圧を行っていました。アメリカからの軍事顧問は、この時どういう役割を果たしていたのですか？

—— ウルグアイ軍は、アメリカの武器援助や軍事訓練を受けていた。将校らは精神面では、パナマで受けた訓練に多大な影響を受けていた。アメリカ軍事顧問団は、すべてを冷戦の尺度から分析、判断した。例えば共産主義は悪魔であり、根絶やしにせねばならない、などといったようなものだ。また、フランコ主義者や国家社会主義者の思想が軍内部に広がっていた。

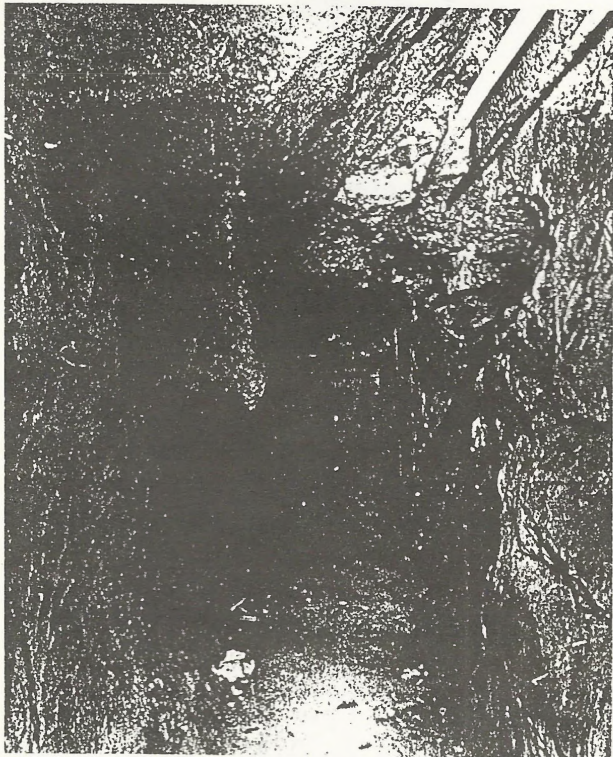
【Q】つまり、凄まじい弾圧、「科学的」弾圧のためのインストラクターというわけですね。

—— そうだ。しかしアメリカよりも更に右寄りの将校たち、第2次大戦下、ナチズムを信奉し、ファランジスト、ヒトラー、ムッソリーニなどに強い影響を受けた将官たちのクラブが、軍内部に存在していた。公然とは登場できなかったが、軍から追い出されもしなかった。

1970～72年、多くの将軍たちがこのメンバーに加わった。軍事独裁政権が誕生してから数年後、アメリカはこれらの軍人たち、すなわち「米大統領カーターは、共産主義者だ」と声高に叫ぶ者たちに対する軍事援助をストップした。

【Q】暗殺殺戮部隊や組織的拷問は、大衆運動を破壊するのにどういった役割を担ったのでしょうか？

—— 殺戮部隊やこれに類する準軍事組織は、ラテン・アメリカ全土から呼び集められた。多くは兵士や警官か



ツパマロスの掘った作戦用地下トンネル

ら成っていた。制服の下には、凶悪犯罪者の素顔を持つ者たちだ。

階級闘争が、ある一定のレベルに到達すると、拷問攻撃が全国規模でなされるようになった。グアテマラでこのような弾圧が拡大していたことから、これは「グアテマラ化」と呼ばれる。

【Q】これまでの時点で、ツパマロスにとっては何が力量的に不足していると思われますか？

—— まず力量面で言うと、我々は多くの成功を勝ちとる闘争形態を發展させてきた。我々は、派閥セクト主義者ではない。常に大衆運動建設を支援してきた。そして革命意識を人民にもたらした。これは今もウルグアイ人民の中に根づいている。力量的に欠けているとすれば、我々は自らのゴールに到りついたことを認識しておらず、敵に完全に打ち勝つための闘争の新たな手段を發展させていくことの責任を理解していなかった。これには軍事面についてのことも含まれる。

軍の反乱とツパマロスの敗北

【Q】1973年6月、軍は反乱を起こしました。全国的な2週間にわたるゼネストが闘われたにも関わらず、軍事独裁政権は倒れはしませんでした。この反動としてあった第一波の弾圧以後、ツパマロスや大衆運動は？

—— その時点では、大衆運動に責任を負うMLNの組織構造は影響を受けてはいなかった。6月軍事クーデターで、議会が解散させられた時、大衆運動は圧倒的なゼネスト闘争を展開した。人民は闘いを継続したが、何らこれを防衛する手立ては持っていなかった。軍事組織であるツパマロスは、この時活動を封じ込められていたからだ。共産党など、他の組織は解体こそされなかったものの、実質的に機能しなかった。今日でも、これが議論の対象となっている。何故、機能しなかったのかと。

【Q】軍は、抵抗闘争を封じ込めた後、何を行ないましたか？

—— 軍は労働組合や学生たちの活動基盤、組織機構の全てを解体し、政党や大学での自治選挙闘争を、非合法化した。かつて「ラテン・アメリカのスイス」と謳われたウルグアイは、わずか数カ月で完全に滅び去った。

監獄は囚人で溢れかえり、数千もの人々が拷問、殺害の恐怖にさらされ、失踪、亡命者が相次いだ。まさに未曾有の恐怖支配の到来であった。

【Q】軍は基本的には、ウルグアイ・ブルジョアの武装勢力部分として機能したのですか、それともアメリカ帝国主義の忠実な下僕としてあったのですか？

—— わが国において、帝国主義とブルジョアジーの利害関係について定義するのは難しい。ウルグアイ人はリンペン・ブルジョアジーである。民族的アイデンティティーが失われている。帝国主義の真の従者というより、緩衝剂的役割を負っていると言えよう。もちろん彼らの

利害関心は、この国にある。だが、彼らは強大な力を持ち合わせていないし、発展的展望などもないだろう。結果的に彼らは抑え込まれている。軍が行なったのは、本質的に2つの要素を統合したことだ。つまり専制支配の「武装翼」として機能したことと、同時に北米の利益要求にもかなうものとして機能したということだ。

歴史的経過で言えば、結局、軍は単独ではしゃぎ出すぎて、コントロール不能となってしまった。これは、軍による政治的統治の終焉を意味していた。

【Q】軍は経済分野支配への移行を試みようとしたのでしょうか？かつて、グアテマラで軍が行なったのと同じように…。

—— そうしようとはしていたようだ。だが一部将校らの利己主義により、成功はしなかった。

【Q】将官、將軍らは、軍を自分たちの個人的な私物と見なしていたのでしょうか、それとも企業の補完的役割を負わされていたのでしょうか？

—— 個人的な私物と化していたと言える。そして国内産業をコントロールしようとしていた。管理職のポストは最も甘い汁の吸える地位だ。だが、ウルグアイは小さな国であり、これら「野心」に満ちた兵士たちにとって、その分け前は微々たるものだった。少しでも多くの分け前に与かろうとする兵士たちの間に腐敗が始まり、軍の内部分裂が広がっていった。

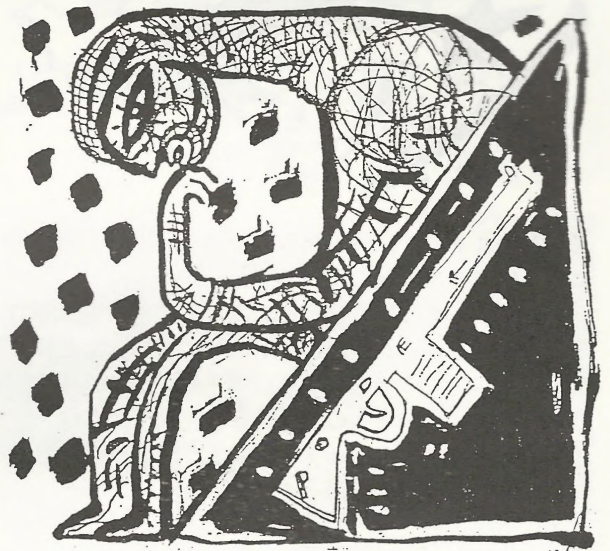
【Q】70年代後半には、まだ大衆運動の組織的構造は存在していたのでしょうか？もしそうなら、ツパマロスはこれにどのような影響力があったのでしょうか？

—— 厳しい弾圧下であったが、実際には全ての左翼勢力内では、組織活動は続けられていた。共産党は、彼らの「路線」にも関わらず、厳しく弾圧され、1975～76年には多くの党員が過酷な状況での活動を余儀なくされた。まさに暗黒の期間、苦しみの時であった。多くの急務の課題があったが、活動は制約されざるを得なかった。この時期、国外亡命した者たちの活動は、非常に重要だった。1980年になって、大衆運動は再び高揚することとなった。

【Q】その原因は？新たな大衆運動は、どういう環境と要請の中から生まれて来たのでしょうか？

—— 簡単に言うと、軍が原因であろう。軍は圧倒的な力とプロパガンダにより、大衆運動を完全に封じ込めたと思い込んでいたようだ。歴史の捏造がなされ、街頭では4人以上がたむろすることは「集会」と見なされ、取り締まられた。誕生日のパーティーを開くのにも警察の許可証が必要だったのだ。

左翼の活動家らは国外に逃れていたか、獄中にいた。こうした状況下、軍は強権支配、専制独裁を合法化すべく、デッチ上げの「国民投票」を行なった。軍以外の組織のあらゆる情宣活動は禁止され、多くの民衆が「尋問調査の対象」として拘束されていった。軍は完全なる勝



利を確信していた。だが、情宣、キャンペーンなどの全く禁止された中、民衆は、軍の支配に「ノー」と投票したのだ。軍事独裁の大きな敗北であった。同盟関係にあったわずかばかりの国々との関係も失い、国内的にはまさに崩壊の一途をたどるのみであった。

【Q】軍はこの他どのような失敗を？

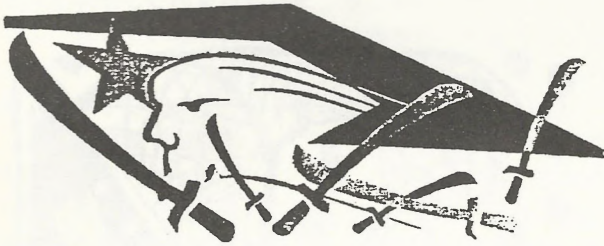
—— 労働組合を、「御用組合」に仕立て上げようと画策していた。組合のリーダーらは、新しい世代の面々で、組合活動の経験がほとんどなかったにも関わらず、非常に優秀であった。小さな事務所しかなかったが、階級意識に基づく組織構築を図り、活動を行っていた。1983年5月1日、メーデーデモが許可されることとなった時には、巨大な民衆の波が街頭に押し寄せることとなった。これが、瀕死の状態にあった軍事独裁に最終的なトドメを刺すこととなった。

【Q】軍は、民衆を分断し、個々バラバラに孤立化を図ろうとする目論見には成功したのですか？

—— いや、軍はこれに完全に失敗した。むしろこれと反対の結果をもたらすこととなっていた。私が投獄される以前には、街頭で出くわした、見ず知らずの他人には堅苦しい敬語を使って挨拶をしたものだったが、1985年に出獄した時には、状況は変わっていた。誰も彼も気さくで、他人とよりいっそう親しくつきあっている光景が見られた。

【Q】分断化という手法で、ある程度の「成功」を収めたチリの独裁体制とは違うのですか？

—— そうだ。ピノチェト独裁体制は、ネオ・リベラル勢力の利害関心の下、経済モデルプランを導入した。ウルグアイでは、軍政の結果もたらされたのは、経済破綻であった。先に触れておくのを忘れたが、これこそが独裁支配の崩壊した大きな要因であろう。



【Q】ウルグアイの軍事政権は、社会的生産部門を新たに構築するのに失敗したのですね。

—— そう、そしてむしろ逆にウルグアイの生産部門に経済破綻をもたらし、破壊し尽くしてしまったと言える。軍事政権は、この国を経済ビジネスのパラダイスにしようと企図し、巨大資本の国際銀行に、国内の銀行を売り払ってしまった。これはブルジョアジーと軍事政権との間に、内部矛盾を引き起こすこととなった。

ツパマロスの現在

【Q】ツパマロスが大衆運動において果たした役割とは、具体的にどういったものだったのでしょうか？人権抑圧を告発する動きに対して、政府が行なったキャンペーンでは、実際、政府はどのような措置をとったのでしょうか？

—— 軍の強い圧力下にあった政府は、軍に主導権を任せる方針をとっていた。独裁が崩壊した時、軍が多くの凶悪事犯に関与していることを証明する事実が相次いで明るみに出た。議会での喚問の後、これらの証拠が法廷に提出された。兵士らは、有罪判決にびくびくして日々を送っていたことだろう。軍の役人が出廷を命じられた際、「軍務にある者は出廷を拒否できる」とする条文をタテに、軍は出廷を拒否した。こういった別の意味での「クーデター状態」の中で、社会構造の危機は拡大することとなった。

【Q】それから？

—— 政治家と軍は、秘密合意を交わした。左翼には、この密約の存在など知るよしもなかった。1986年12月22日、右派諸政党は、あらゆる有罪告発を無効とする法案に賛成した。独裁を打ち倒すのに貢献した多くの民間出身の政治家らが、突然この法案を支持したのだ。民衆はただ驚くばかりであった。ウルグアイの独裁政治体制と帝国主義は、再び武力をもって権力の座を固守せんとしたのだ。その理由は暴行、凌辱などに対する人権調査が、これらの行為に関わった兵士、役人ら一部の罪を告発したのみならず、軍全体の関与と、そのシステムの実態を暴くものであったためである。軍のシステムにとって、裁判の継続は大きなダメージとなり得るものであった。

投票翌日、失踪者、行方不明者の母親たちは、この法案の再度の国民投票を呼びかけた。

【Q】誰がこの再国民投票運動を組織したのですか？

—— 広範な共同同盟が呼びかけられ、「国民投票のた

めの全国運動」が設立された。これにはすべての左翼勢力や人権団体、教会、市民団体などが参加していた。ウルグアイ人口 300万人のうち、実に63万4702人もの署名が集まった。

【Q】この運動ではMLN／ツパマロスは、どのような役割を担いましたか？

—— 行方不明者の母親たちの声を最初に取り上げ、運動に取り組んだのがMLNであった。1年半後、大衆運動高揚の機運が高まった。各家庭を廻り、この問題を訴えて署名を集めた。出廷を拒否し続けていた軍は、暴行などの人権審判に関する喚問の一切を凍結、拒否しようともくろんだ。だが、事態はこれと全く逆に展開した。2年の内に大法廷が開かれ、ウルグアイにおける人権侵害、暴行などの実態が大きく暴露されることとなった。

【Q】これは長く政治活動の中心であったモンテビデオと他都市との間にどういった関係性をもたらしましたか？

—— 左翼は、かつてないまでに国内で活発になり、また人々は軍の犯罪について公然と知り得るようになった。以前では考えられなかった状況に、皆、驚くばかりであった。だからこそ、このキャンペーンは大衆に政治意識を目覚めさせ、組織することができたのだ。

【Q】国民投票は最終的には敗北しました。この結果どうなりましたか？敗北への怒りは、左翼に力を結集させることとなりましたか？

—— 左翼はかつてないほどの票を得た。これは少なからず我々にとって力となった。活動家たちは、もちろんこの敗北に落胆したものの、多くの成果を成し遂げ、獲得することができたことを認識しており、さらなる継続的な活動の自信を持った。ラテン・アメリカにおいて、ウルグアイは、軍告発と、その罪を問う過程で、政治家と軍の密約や法廷での「審判」などがなされる中、この問題はずっと続いてきた。人民の手による法廷で、すでに2年にわたり、この喚問は続けられている。これは左翼の成長にも影響を与えている。

【Q】総選挙についてですが、フレンテ・アンプリオ（広範なる戦線）により、左翼勢力は伝統的な2大政党制度を1989年打ち破り、前進を勝ち取りました。首都モンテビデオでは、左翼が最大勢力となりました。ツパマロスは、この選挙キャンペーンに、どのように関わったのですか？

—— 我々もフレンテ・アンプリオの一部である。他のグループも同様、この同盟に加わっている。我々や他のグループらはまた、人民参加運動（MPP）に参加している。これは、MLNよりも広範な形の大衆運動であり、選挙での存在以上の意味を持っている。青年、女性、文化組織が共にあり、様々な活動分野で多岐にわたる活動を展開している。フレンテ・アンプリオの一部として我々はまた、選挙に参加してきているのだ。

【Q】ツパマロスも同じく候補者を立てましたか？

—— MLNは候補者は出さなかった。MLNで広く知られているリーダーらは、候補者にはならなかったものの我々はフレンテ・アンプリオの運動に協力し、MPPを積極的に支持した。

【Q】なぜ組織として、候補を出さなかったのですか？

—— これにはフレンテ・アンプリオ、MPP、MLNの間で議論が重ねられた。MLN内部では、選挙における問題については、長い間話し合われてきたことである。

さらに左翼の連合とMPPを結集軸とした潮流の発展を支持していくことを考慮し、MLNは独自の候補を立てることはしなかった。また別の理由としてツパマロスの存在がある。ツパマロスは過去においても、将来においても選挙よりも他の領域で、その力を発揮することができるのであり、人民は我々のことを理解しているし、それなりの期待もしているようだ。だから選挙で我々に候補を出して欲しいと、人民は思っていないだろう。これは困難を要した議論であったが、結果的にMLNとMPPの多数の意志にもとづいて決定された。

【Q】MLNの声明を読むと、MLNが候補者を出す可能性について、他の左翼潮流から留保要請があったようなのですが？

—— これには若干の理由がある。MLNが候補を出せば、圧倒的支持を得ているMLNに多くの票が流れてしまうことを心配したのだろう。だが左翼でもMLNと関係のない人々も多いし、フレンテ・アンプリオに票を集めるために我々がこの戦線に参加すべきだ、と主張した人もいる。右翼の側は、MLNが候補者を出さないのは、我々が民主主義を認めず、新たな武装闘争を展開すべく準備している証拠だ、などと喧伝している。

【Q】モンテビデオで大きな支持を集めて、市長選出に至ったフレンテ・アンプリオの今後の政治展開の可能性については、どのように見えていますか？中央政府が財政を管理し、経済状況が悪化する中、首都モンテビデオは重要な場所だと思われますが…。

—— 我々はウルグアイの最も重要な地域で勝利した。右翼政府の下で、最重要都市の市長が左翼代表という、一種のパラドックスを政府は抱え込むこととなった。だから当然、問題も出てくることだろう。さらに付け加えれば、他の問題も同様に存在している。すべての集中しているモンテビデオでは、もう何世代にもわたり、右翼による管理機構ができ上がり、機能してきた。この悪しき「遺産」が、最も厄介なものである。今までのところこれらの問題に取り組んで来ることができたが、多くを変えることはできなかった。すべての試みを同時に成し遂げるのは容易なことではなかった。我々にとって重要なポイントは、都市の民主化であった。そうすれば、地域住民は、地域内に設けられた自分たちの自治会組織で諸問題を解決することができる。

【Q】実際にこのプランのもと、都市を民主化することはできたのでしょうか？

—— 地域住民の手による自治計画、財政管理などを達成すべく、努力していた。モンテビデオにはびこる官僚主義は、深く根を張っていた。中心地の外から問題を解決することは出来なかった。だからこそ、我々は18に分割した小自治体制度を造り、これをもって、例えそこの住民たちが地域の伝統的党勢力、コロラド党やブランコ党に組織されていたとしても、自分たちで自治管理できるようになれば、と考えた。右翼勢力にとっては、地方政府がうまく機能しようと、植物園が建てられようと街灯の明かりが灯されようと、どうでもよいことであった。だが、地域住民の手に自治管理を委ねるという我々のプランだけは右翼勢力を大いに悩ますこととなった。

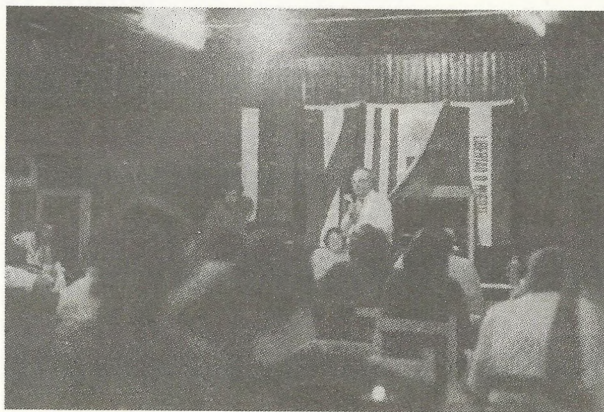
【Q】民主改革と、腐敗浄化の他に何か思いついたことはありましたか？例えば技術的な政権改良プランなど…。

—— もちろん他にも多くのことをせねばならないと考えていた。とりわけモンテビデオ政府内では、腐敗や横領に即刻終止符が打たれねばならなかった。

【Q】大衆の経済状況を改善するためには何が？例えば公共交通システムの確立や、住宅問題への対処などが挙げられますが…。

—— 我々は選挙での公約を守り、公共交通料金を低く抑えてきた。公共交通、住宅問題は我々も取り組まねばならない課題だと深く認識している。だが、あまりにもシンプルな理由だが、我々は財政的困難に直面しているのだ。だからこれらの諸問題には、できるだけ自助努力を刺激しながら、解決出来るよう試みている。この一例として、コレラ予防プランなどがあった。住宅を建設する財源には乏しいものの、地域コミュニティを再開発して行けるような建設資材に関しては、供給できている。地域内の商店では、貧困層の人々でも最低限の食料品を確保できるように、基本物価を相当低く抑制している。

【Q】ペルーのリマでは連合左翼（U I）も、同様の問題を抱えています。ブラジルの都市部に支持を拡げている労働者党（PT）も同じです。こういった問題のために議会内左翼は多くの市長職を経験するなかで、野党に



フレンテ・アンプリオの集会（モンテビデオ）

弱体化させられてしまいました。フレンテ・アンプリオについては、どのようになると？

——我々は自らの誤りに学び、これを繰り返さないよう心がけてきた。わけてもウルグアイ人民は、政治的意識が非常に高く、モンテビデオで左翼の市委員会が存在してはいても、ここが地球上のパラダイスとなったわけではないと、承知している。何を成し得るかをよく理解し、腐敗を許さない状況を勝ち得た。

【Q】議会での闘いと、大衆運動での活動における戦略的重要性とは、何でしょうか？個人的所見をお聞かせ下さい。

——闘争の中でも、選挙という分野は、労働組合や学生運動と同様に重要である。だが、最優先に重要なものであるとは思わない。ここが他の左翼グループとは違っているところだ。以前同様、早急に取り組まなければならない課題は、他にも山ほどあるのはよく認識している。現在のところでは、左翼は「94年全国選挙」で勝利しそうな勢いである。これは左翼運動全体にとって大きな力となることだろう。だが、これは議会や選挙のみによってもたらされるものではない。人権擁護キャンペーンや労働運動など、社会運動の組織化もまた重要なファクターなのだ。我々の「力」は、時に選挙のなかで、また時には大衆ストライキ闘争のなかではっきりと明示されるのだ。

【Q】つまり議会での活動も、大衆運動と同様に様々なレベルにおいて、左翼の異なった「力」を一つに結合させていこうとすることを目指しているのですね。

——その通り。我々が戦略的に目指すものとは、様々な勢力を結集させることだ。今現在、我々は逆説的状况にあると言える。選挙では勝利を収めているものの、労働運動では力を失いつつあるからだ。ストライキのほとんどは失敗に終わり、労働者は失望を隠せないでいる。学生運動も同様、依然として闘いは停滞している。同時に貧困層の暮らす地域では、事態は大きく進展した。我々は、ある戦線では勝利したが、別の戦線では敗北したのだ。だから我々の「力」の結末は逆説的状况にあるのだ。



ツパマロス政治囚の釈放を要求するデモ

と言える。我々にとって、そして左翼運動全体にとって真の活動家（＝「闘士」）が減ってしまったことは、最も悲しいことである…。

【Q】なぜ、減ってしまったのでしょうか？

——多くが、こういった闘いをやめてしまった。これは先にも述べたように、ラテン・アメリカ全体に言えることだ。ヨーロッパにおいても同様である。ウルグアイにおける主な原因は、現在生きるためには2つ以上の労働をこなさなければならず、多くは職場から疲れ切って家に帰ってくる。かつて政治活動を行っていた時のような、時間的余裕など、もはやない。また東欧における社会主義の終焉も大きな理由であろう。多くの人々が目標を見失ってしまった。とりわけウルグアイ共産党がそうであった。多くのことがらを、ゼロから考えなおさねばならなくなった。

【Q】こういった兆候は、MLN内部においても見られましたか？

——ああ。ウルグアイ共産党が一番影響を受けたようだが、もちろん社会党やMLNも同様であった。

【Q】活動家が減っていった別の原因としては、何が挙げられるでしょうか？

——左翼が、多くの誤りを犯したからだと考えている。フレンテ・アンプリオ指導部が、社会民主主義勢力と改良主義者の影響を大きく受けていた結果、大衆を分散化させてしまったのだ。政府との間で、多くの「取り引き」が交わされた。活動家はこんなことに賛成するはずはなかった。また、ストライキ闘争の多くも、誤った形でなされていた。様々なこういう要素が絡み合って、民衆の間に失望感が漂いだした。だが、これは一時的な減少だと我々は考えている。

【Q】若者たちはどうなのでしょう？若者が抱える特別な課題とは何でしょうか？

——独裁政権打倒の決定的な役割を担った、とは言わないまでも、若者は重要な役割を果たした。彼らは独裁政権の時代に、社会運動に加わることとなった。独裁打倒の闘争を導かねばならなかったはずの旧来の左翼の指導層は投獄されていたか、国外亡命していた頃だ。だから、左翼と共に活動する経験を彼らは持つことができなかった。独裁の崩壊によって、経済問題も解決するだろうと左翼は楽観していた。後にこれが誤りだったと彼ら自身気づくことになった。これは彼らにとって大きな失望をもたらした。左翼は、若者たちの大きな支持を集めることにも失敗してしまった。

【Q】亡命から帰国した古き闘士たちや、あなたの場合のような獄中にいた活動家たちには、豊富な経験と、理論知識の蓄積があると思われますが…。

——ウルグアイ同胞への思いと深い理解の念を抱いて、我々は国外や獄中から帰ってきた。我々から学ぶことを

必要としていた若き同志たちを、小さな子供のごとく扱ってしまった。あまりにも傲慢だった。若者たちこそが時代に敏感で、より状況を把握していたにもかかわらず我々は旧来の手法で、彼らの新鮮で、かつ深い洞察を低く評価してしまった。この結果、大学や労働組合などの内部に様々な混乱をもたらすこととなってしまった。

【Q】人生の全てを活動に費やすような「真の」活動家の理念は、何らかの役に立ってはいたのでしょうか？

おそらく若者たちは、さらにもっと活動的でありたかったことだと思いますが…。

—— まさにその通りだろう。60年代には大衆運動は驚異的な成長を遂げた。このため皆、一日中闘っていたのだ。

だが、これは観念的というわけではなく、むしろ階級闘争に関連したものであった。運動に「参加」するのではなく、全体の一部として機能させられるのであった。これは、歴史的過程から見ても長続きするものではなかった。歴史的な瞬間があり、それから穏やかな期間があった。もし活動家がこのような古き精神の下、若者に多くを期待するのなら、現実とぶつかることとなるだろう。時代は、もう違うのだから。我々が今も地下で闘争を継続し、殺戮部隊に狙われていたなら、今とは違った活動をしているだろう。この時点で、1日24時間体制で運動に全精力を注ぎ込むというのは、意味のないことだろう。

これらのことが若者と、旧来からの活動家との双方に運動的停滞をもたらしてしまった。この状況は、突如到来した。彼らは「市民派」や「改良主義者」などと攻撃されるようになってしまった。

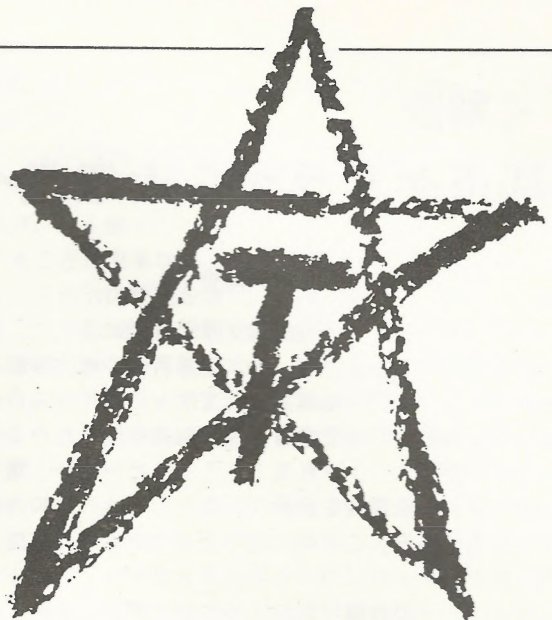
【Q】ヨーロッパにおいても同様のことがあったかと思っています。湾岸戦争の際、大衆運動には、次々と人々が加わって来ました。そしてこれらの人々は、驚いたことに今も運動組織でがんばって活動しているのです。だけでも誰がこれを実際に組織しているのかを見ると、かつてと同じ顔ばかりが並びます。大衆は、やって来ました。そしてデモに参加し、そのあとみんなで家に帰ってしまったのです。

—— ウルグアイでは、多くの人々が大衆デモに加わってきた。我々の書籍や雑誌はよく売れた。だが、集会に出てきた者はほとんどいなかった。

【Q】さて、これまで大衆運動、選挙、連立政策などについて伺ってきました。まず、インタビューのはじめに、闘争のあらゆる形態は、それぞれ重要である、と言われましたが、では非合法活動はツパマロスの活動にとって今も何らかの実際的な役割を担っているのでしょうか？

—— 今現在の時点で言えば、非合法活動などほとんど存在していない。唯一、極右勢力が現在こういった活動を行なっているのみだ。左翼のリーダーらは、(権力機関である)殺戮部隊によって脅迫を受けている。

【Q】武装闘争はもう意味を失い、合法闘争でゴールを



目指すという立場をツパマロスはとるのでしょうか？

あるいは歴史的状況から見て、今は武装闘争にふさわしい時期ではない、と考えておられるだけなのでしょうか？

—— どちらかと言えば、おそらく後者の方だろう。これらのイデオロギー的な問題をあれこれ考えるのは、賢明ではないかも知れない。原理原則などにに基づき、非合法活動をするか否かを決定していくのであれば、必ず過ちを犯すこととなる。イデオロギーではなく、日常的な現実性に関連する戦術的、戦略的諸問題が存在している。地下闘争を始めるのは、もはや選択の余地がなくなってしまった時である。

【Q】つまり必要な時以外は、武器はとらないということですね。

—— もちろん。こういった手段が適当なのかは、常に課題である。

【Q】あなたがたの同志であるマレナレス氏は、「左翼全体が勝利するなら、MLNは非合法性を取り戻す闘いを行なうかも…」と提起しましたが…。

—— 好まざることはないが、左翼全体が勝利するなら非合法に戻るかも知れない。ウルグアイは、継続的なファシストの脅威の下にある国なのだ。彼の引用をここでわざわざ用いる必要はない。つい先日、ある軍高官が「左翼が『94年選挙』で勝利する状況となったら、何が起こるかはっきりしている」と語っている。

【Q】これについては、どのような準備を？

—— 準備は万端だ！(笑)

特に大衆運動の強化といった点では、我々には地下活動の経験もあり、これを仲間や同志たちに引き継いでいけるだろう。必要な時に備えて、準備しておくことができる。我々の置かれている状況を見極めることを忘れてはならない。極右をあなどってはいけない。私やツパマロスのリーダーらは、ファシストの脅迫を現在も受けている。自ら防衛し抜いて行かねばならない。

都市ゲリラから大衆党へ

ツパマロス略史

ツパマロスは、その戦闘的ゲリラ活動によって、世界に広く知られることとなった。企業幹部や権力中枢にある人物を、「人民の捕虜」として次々に誘拐する作戦を連続的に展開し、中でもCIAの訓練を受けたウルグアイ警察の拷問スペシャリスト、ミトリオーネや、電力公社重役で大統領顧問を務めていたレヴェルベルの誘拐作戦は有名である。この他、地方都市パンド市の占拠、投資会社モンティ社に対する現金奪取戦闘や、投獄中であったメンバーの脱獄など数々の作戦を闘い、軍政下のウルグアイで革命的左翼運動を前進させた。

1985年に軍事独裁が終息し、民族解放運動（MLN）／ツパマロスは、「今後は合法活動を目指す」と宣言。

1988年、ツパマロスは、フレンテ・アンプリオ内の左派を集めた人民参加運動（MPP）の設立メンバーに加わり、またMPP内のコミュニストや無派閥勢力からなる社会主義労働者党（PST）にも名を連ねている。

1989年、MPPのフレンテ・アンプリオ参加に対し、キリスト民主党（PDC）、人民政権党（PGP）は、「テロリストグループ」などとは共に活動できない」として、フレンテ・アンプリオを脱退した。

フレンテ・アンプリオの躍進

チリのアジェンデ時代の人民連合をモデルとして、ウルグアイでは1971年、フレンテ・アンプリオが結成された。これには社会主義政党、共産主義政党、キリスト教民主主義者や、ウルグアイの伝統的政党であるブランコ党やコロラド党内の左派勢力、さらには武装組織であるツパマロスや3月26日運動の合法部分に参加した。同年フレンテ・アンプリオは選挙に出馬し、全得票数の18%を獲得している。

1984年の選挙で、フレンテ・アンプリオは20%の票を獲得。更に1989年の全国総選挙では22%を得て、モンテビデオ市の与党となり、ウルグアイの人口の半分が集中する首都で市長選出を果たした。

94年11月27日には、大統領、議会、市議会の同日選挙が予定されている。現在の予想では、現与党ブランコ党が大幅に議席を失い、コロラド党とフレンテ・アンプリオの得票争いとなる、とされている。

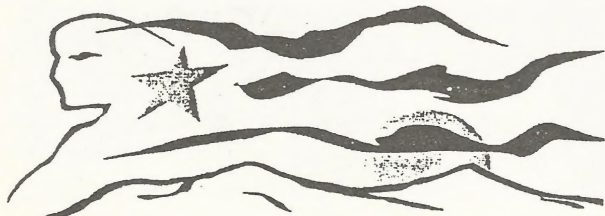


昨年11月18～20日にかけて、フレンテ・アンプリオの全国総会が開催され、「94年選挙」についての方針が討議された。

また11月20日には、ツパマロスの総会も別に開かれ、選挙に独自候補を出すことが決定されている。ツパマロスは現在も、MPPの政治的枠組みの中での一定の政治活動を展望してはいるが、今回直接的にツパマロスとして独自候補を立てることとなった。これについてウイドブロは、「選挙は決してタブーではなく」、「各局面においては、それに見合った闘争形態が必要」と語っている。これは軍政の弾圧下で、激しい武装闘争を戦った都市ゲリラ組織ツパマロスの、「大衆党への転換」を示すものである。

ツパマロスの闘いの歴史については、1979年に発行された『反帝反日通信／創刊号』が特集を組んでいる。これには、幾つかの軍事作戦の報告、ツパマロス宣言、組織内規、革命政府綱領などの重要文献が翻訳されており、体系的にまとまったパンフレットである。入手方法は、模索舎（東京都新宿区新宿2-4-9／TEL 03-3352-3557）で扱っているの、直接申し込みをしていただきたい。価格は700円。

以上編集部



フィリピン共産党中央委員会声明

新人民軍結成25周年を祝う

フィリピン共産党（CPP）／新人民軍（NPA）は、民族と社会解放のための英雄的闘争25周年を祝う。

新人民軍（NPA）のゲリラ兵士たち（解放区にて）

CPP中央委員会 1994年 3月29日

1968年12月16日のCPP再建後まもなく、CPPは1969年3月29日にNPAを組織した。NPAは、たった9丁の自動小銃と26丁の、決して優れているとは言えない武器（単発ライフルと拳銃）で武装した60人の赤色戦士達によってスタートしたのである。

NPAは、古い革命運動の伝統を受け継ぐタルラック村第2地区に、約8万人の農民からなる最初の大衆基盤を獲得した。この農村の大衆基盤は直ちに、合法的民主勢力と1万5千人たらずの都市大衆基盤を統括することとなった。

党は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の導きの下、新民主革命の総路線に沿ってNPAを設立した。党の絶対的指導の下にNPAは、慢性的危機にあるフィリピンの半植民地的、半封建的状况に起因している長期にわたる人民戦争を戦っている。

労働者階級の前衛勢力たるCPPは、革命の新民主主義、社会主義段階を遂行することを決定した。NPAを建設することによって、党政治権力を奪取するという、革命の中心課題について回答しているのだ。そして、党は、最も効力ある作風の下、労働者階級と農民の基礎的同盟を打ち立てる。

人民戦争発展のため、党は革命的武装闘争、ならびに都市に基盤をおく合法的民主運動、地方政治機構を包囲する革命的連合戦線と民族民主戦線（NDF）や、合法諸共闘組織を運営、遂行し、統括する。革命的武装闘争は、政治権力奪取の主要な闘争形態である。そしてそれは、農村から都市を包囲し、全土にわたる攻勢と都市の奪取を行なうのが可能になるまで力を蓄える、戦略的路线によって遂行されるのだ。

民族連合戦線は、被搾取階級である労働者、農民を奮い立たせ、小ブルジョアならびに中産ブルジョア階級を味方につけ、最悪の反動勢力と、その主人たる帝国主義をいつでも孤立、敗北させるために、買弁商人や地主反動勢力との間にもたらされる分裂を有効に利用する。

外国独占資本と地方反動勢力に対する新民主革命の枠組みにおいて、党とNPAは、民主主義革命の主眼である土地改革を遂行するために反封建路線を追求する。主要には、貧農、中農そして農業労働者に依拠し、中農を味方につけ、富農を孤立させ、上流階級の権力を孤立させ、破壊するために、彼らと知識人の間の不和を効果的に利用する。

NPAは、党の指導の下に、広範かつ激烈なゲリラ戦



争を遂行することによって、また、土地改革を遂行し、大衆的基盤を建設することによって偉大な勝利を獲得する。これら3つの要素は不可欠である。ある要素が欠けたり、他を犠牲にして過度にこれが行なわれる時、人民戦争にとって、全体としては逆の結果をもたらすこととなる。

しかしながら、武装闘争には紆余曲折がある。左翼の主観主義的誤謬やプロレタリア革命路線を妨害する右翼日和見主義との軋轢があるのと同様に、とりわけ米帝の支援の下にテロリズムを指向する支配体制に起因する多くの諸問題が存在している。

NPAの勝利は、1980～91年の長期に長らく正されなかった主要な過ちがなければ、より偉大なものとなったであろう。これらは、早まった「組織化」かつ戦略的反攻、そして都市暴動主義と軍事的冒険主義といった「左翼」日和見主義も指し示すものである。同様に、これには改良主義としての右翼日和見主義の誤りと、多数の幹部を地方へ向かわせないようにしてしまった議会主義をも含むものである。

広範かつ徹底的な整風運動が、1992年から行なわれた。これは、まぎれもなく成功を勝ち取ったのである。主要な過ちと欠点は正され、克服された。これは、敵に立ち向かう全ての革命勢力と人民の、戦う意志と能力を高揚させることとなった。

勝利的な革命的武装闘争の年月を通して、NPAは強大な勢力に成長した。それは、戦闘の試練と革命的経験の蓄積であった。NPAは強力に成長し、アメリカとマルコス政権の長きにわたるファシスト支配に対して、続いてアメリカとアキノ政権のみせかけの「民主」支配に対しての、闘いの激しい試練の中で鍛え上げられたのであった。これは、アメリカ・ラモス政権体制を挫折させるために継続され、戦場で勝利を勝ちとるのである。

NPAは自動小銃で武装した何千もの常備ゲリラ戦士

を擁している。これとは別に、更に多くの地方ゲリラ、決して優れているとは言えない武器を持った義勇兵、自衛部隊がいるのだ。彼らは、村落の25%（1万～4万の村）、60から73の地方の多大な部分で活動している。

地方政治権力組織によって統括される地方農村の大衆基盤は、何万にも達している。これらは、農民、労働者、女性、青年、文化活動、子供といった各種の大衆組織に登録された大衆をも含めてである。これらは、教育、厚生、土地改革、生産、金融、防衛、文化活動、調停その他の任務につく大衆組織を担当する作業委員会によって補助されている。

非常に小さく、わずかなスタートから、NPAは、今

日の自信に満ちた進歩のレベルに到達した。その勝利は、自身の革命軍の育成を願い、民族、社会の解放のために戦う人民の途切れることなき参加と支援によるものである。

NPAの英雄的戦士達は、外国独占資本と国内搾取階級に反対するフィリピン人民の利害、そして民族と民主的諸権利のための戦いに、如何なる苦難も死をも恐れない。彼らは、より偉大な勝利を獲得することを確信しているのだ。そして更には、国際主義者の任務の達成と、帝国主義に反対し、社会主義と共産主義の実現のための世界プロレタリアートと人民の共通の革命闘争への貢献を自覚しているのである。

ペルー共産党／センデロ・ルミノソ綱領

ペルー共産党／PCPは、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に立脚する。とりわけ、毛沢東思想と、我が党の指導者、ゴンサロ議長によるペルー革命への具体的諸条件のための、この普遍的真理の創造的応用としてのゴンサロ思想に基づくものである。ペルー・プロレタリアートの、組織された先鋒たるペルー共産党は、国際プロレタリアートの一員でもあり、以下の非常に重要な基本原理に依っている。

- ▷矛盾：永久普遍の事象の絶え間ない変転の、唯一かつ根源的な法則。
- ▷大衆は歴史の創造者であり、「抵抗の権利である。」
- ▷階級闘争、プロレタリア独裁、プロレタリア国際主義。
- ▷確固とした自立性、自主決定、自主依存の立場をつらぬくマルクス・レーニン・毛沢東思想にもとづく共産党の必要性。
- ▷帝国主義、改良主義、反動勢力との、非和解性下での容赦なき戦闘。



センデロ・ルミノソのゲリラ兵士たち

- ▷人民戦争による権力奪取と、その防衛。
- ▷党の軍事化と、革命の3機関の同軸的建設。
- ▷党発展の原動力としての2つの路線闘争。
- ▷継続的なイデオロギーの発展的变化と、命令系統における全政治化。
- ▷人民と世界プロレタリア革命に奉仕し、絶対的な無私化と、正義を労働の正当な形態に回復する。

ペルー共産党は、共産主義をその最終目標とする。今日のペルー社会は、帝国主義、官僚資本主義、半封建制のもと、抑圧、搾取状態におかれている。革命は民主的第1段階であり、それに続いて文化革命を達成するために社会主義的第2段階がある。この時、全土にわたる権力奪取を目下の目標としつつ、人民戦争を通じて党は民主革命を発展させる。この終了に際しては、我々は以下の目標を設定する。

民主革命綱領

1. ペルー国家の破壊 — 巨大ブルジョアジーによって率いられた搾取側の独裁 — これを抑止せんとする抑圧的武装勢力とあらゆる官僚機構の破壊。
2. 帝国主義の抑圧を一掃する。まずもってアメリカ、ソビエト社会帝国主義、他、あらゆる帝国主義支配と帝国主義諸国の独占、工場、銀行、対外債務も含む、あらゆる形態の私有財の没収。
3. 私有、国有を問わず、官僚資本主義を破壊し、新たな国家の利益のために、帝国主義に関係する全ての経済的利益、所有、権利を接収する。
4. 半封建制下の財産と、その存立基盤の全てを精算、接収し、貧農に優先的に土地を分配し、「働く者自身の土地」の原理を適応させる。
5. 地方においても都市と同様、民族ブルジョアジーや中流ブルジョアジーの財産と権利を尊重する。
6. ペルー共産党に領導されるプロレタリアートによる労働者階級と貧農の問題にもとづく階級の統一戦線下で、ペルー人民共和国建設へ向け、闘いぬく。



7. 党の絶対的指導にもとづく新たな形態の革命軍建軍を通じて人民戦争の発展を勝ちとり、旧権力に属するもの、とりわけその武装、抑圧機構となりうる勢力をそれぞれ破壊していく。そして、プロレタリアートと人民のための新たな権力の建設に奉仕する。
8. あらゆる帝国主義、反動勢力からの攻撃から防衛し少数の権利を守るために、全国統一をはかりつつ、ペルー国民の最高形態を現出せしめる。
9. 国際労働者階級の一部として、ペループロレタリアートと、共産主義党の陣型と結束の前進を促し、マルクス・レーニン・毛沢東主義に領導されたる国際共産主義運動の復権をかけ、再統一を促進する。
これらすべてはプロレタリアートが、最後の階級として、その偉大かつ歴史的任務を遂行するためのものである。
10. 「人民の権利宣言」を通じ、これを武装をもって保障することを確認しつつ、労働者階級と人民大衆が自らの血と引き換えに獲得した自由、権利、利益、奪取した権力を防衛せねばならない。宗教の権利は特に尊重されねばならず、また信じることと同次元に、信じないこともまた尊重されねばならない。人民の不利益となるもの、とりわけ無給労働や個人ノルマ、人民にのしかかる抑圧的課税などとは戦わねばならない。
11. 女性の真の平等。青年たちのよりよき未来。母子の保護。高齢者への尊敬と援助。
12. 人民大衆に奉仕し、プロレタリアートの科学的イデオロギーに領導される新たな国民性を具体化させるための、戦う武器としての新たな文化の創造。
教育への、最大限の配慮。
13. ペルー革命は世界プロレタリア革命の一部であるとの認識のもと、アメリカ、ソビエト、帝国主義総体やあらゆる国際的反動勢力や改良主義者と闘いぬき国際プロレタリアートの闘争、世界の抑圧されし者、民族、人民の闘争を支持する。
14. 全土にわたる民主革命の完全勝利へ向けて、ねばり強く、かつ英雄的に闘争を闘う。この段階が達成されたならば、国際プロレタリアート、被抑圧民族、世界人民とともに文化革命を通じて、「人間性」を最終目的たる共産主義へと導くために、即座に過渡期を経ずして、社会主義革命の段階へと移行されるものである。

この国における民主革命は、次の5つに特徴づけられつつ移行されるものであることを認識しておかねばならない。

- 1) ペルー社会の、全般的危機の深刻化。最も原則的には官僚資本主義。
- 2) 虐殺者ガルシア・ペレスに率いられるファシスト、アブラ党（革命人民同盟／中道左派＝前政権党－訳註）にみられる国家の反動的性格の突出。
- 3) 大衆の、さらなる戦闘と抵抗の必然性を獲得しつつ階級闘争のより一層の先鋭化。
- 4) 拡大する人民戦争。
- 5) 「新民主主義」の原理にもとづく人民共和国を、人民は必要としている。

解説／指導者の逮捕と分岐の始まり

1970年代初頭に、ペルー共産党の一分派として設立されたセンデロ・ルミノソ（輝ける道）は、アンデス山中のアヤクチョを中心に活動を強め、十年にしてペルー政府に対して人民戦争を行なうまでに成長した。現在は、根拠地であるアヤクチョだけでなく山岳部の広範な地域を解放し、首都リマにも強力な組織を築き上げている。正式名称はペルー共産党（PCP）であり、センデロ・ルミノソは俗称とされている。ここまで、組織が強力になった要因は、ペルー社会の極端な貧困と、独裁政治であると言えるだろう。これは、民主的な仮面を被ったフジモリ政権となっても変わっておらず、社会運動に対する弾圧は軍政時よりも飛躍的に強化されてもいる。人権団体の調査によっても、この国は、世界で一番行方不明者（すなわち政府によって殺された人々）の多いところである。

フジモリ政権は、自己の抑圧的本質、経済的貧困から民衆の目をそらすためにPCPに対する弾圧を加速し、1992年9月12日にPCPの最高指導者ゴンサロ議長（アビマエル・グスマン）を逮捕した。これに対しては、世界各地の毛沢東主義諸組織を中心とした救援運動が取り組まれており、昨年の5月には大規模な国際統一行動も行なわれている。

ゴンサロ議長は、昨年9月に「武装闘争を止め、階級闘争を始める」時だとして、休戦を提案した。しかし、この提案を巡って内部的に意志の分裂が生じている模様である。今年2月武装闘争継続派のオスカル・フェリシアノ・ラミレスに率いられたPCP新中央執行委員会が成立した。またリマ地方委員会を中心として新しいグループ『赤い道』が設立され、都市部を中心に軍事行動を続けている。『赤い道』は既成の諸組織から「休戦派」を追放し、これを掌握しており、指導者はジェニー・リタ・ロドリゲスと伝えられている。こうした新しいグループからの文書は未だ公表されておらず、正確な情報だとは言えないが、強力な組織が揺れているのは確かなようである。情報が入り次第、順次公表していく予定である。

（編集部）

I R Aのヒースロー空港迫撃砲攻撃はイギリスの権威をズタズタに切り裂いた

I R Aが最初の迫撃砲攻撃を行ってから5日たった3月14日、ヒースロー空港の周囲には英軍戦車が徘徊している。重大な攻撃は、結果的にイギリスの権威を崩壊させたのである。

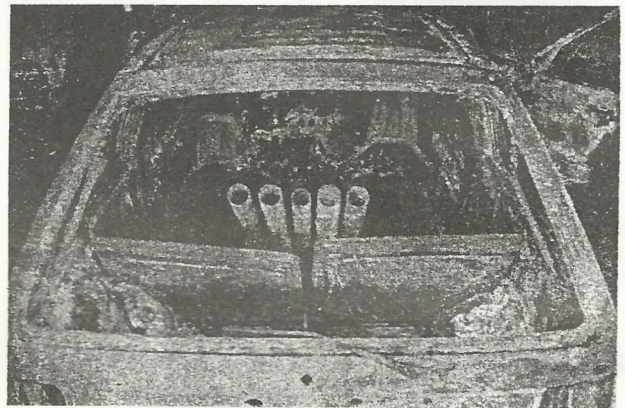
空港境界フェンスで、3両のシミター軽戦車が、武装した警察隊の傍らを巡回している。イギリスの国防省当局者は、戦車は王室警備隊のウィンザー兵舎から来て、「通常の演習」をしているのだと言った。このような「通常の演習」が最後に行なわれたのは、1990～91年の湾岸戦争の時であった。I R Aのヒースロー空港への前回の攻撃は1984年である。

S A S／特殊空挺部隊を含めた英軍部隊は今、24時間の準備体制が整っていると言われている。英国議会議員が、空港防衛の専門家である強力な英国空軍連隊2000人を配備せよ、と命令を下した後、イギリス国防相マルコム・リフキンドは、「何ら心配はない」と論評した。

そうした反応が、イギリスの権力機関に深い衝撃を印す事態が5日間に続いて起きたのである。3度にわたる連続迫撃砲攻撃では、ヒースロー空港の北と南の滑走路、そして4番ターミナルへ計12発の迫撃弾が着弾、炸裂した。何が最もイギリスの権力機関に衝撃を与えたのか。それは、3回の攻撃により、正確な場所と時間に複数の迫撃砲攻撃を放つI R A兵站部の能力が実証されたからである。ロンドンで車を微発するのに成功したI R Aは、それを4発の発射台を備えつけるように改造し、目的地まで運転した。と同様に、混雑した国際空港の周囲各所に、巧みに処理された2つの発射台を設置し、警備当局者や「ダウニング街の主人たち」を大いに悩ませることとなった。自力で開発した金属砲筒式の12発の迫撃弾の発射は、I R A工兵部隊の、戦争遂行に使えるものは何でも使うほどの器用さと能力を明らかにした。

攻撃に応じて、I R A司令部は声明した。全ての攻撃の前には、I R Aの暗号を使用した広範囲にわたる警告

車に設置された迫撃砲発射装置



が出された。最初の攻撃の前には、計8回の警告が報道機関に出された事実をI R Aは強調した。2回目の攻撃の前には、少なくとも迫撃弾が発射される8時間前には警告が出された。I R Aの声明によると、「人々の生命をかけた、計画的かつ皮肉なギャンブルを故意に行なうイギリス当局者たちの命運は、必然的に尽きるだろう。我々の暗号警告に注意しなければならない」。

警察長官ポール・コンドンと傲慢さを誇る特殊部隊の責任者デビッド・タッカー司令官が、4番ターミナルへの警告を6時間にわたって無視したことを、I R Aは非難した。

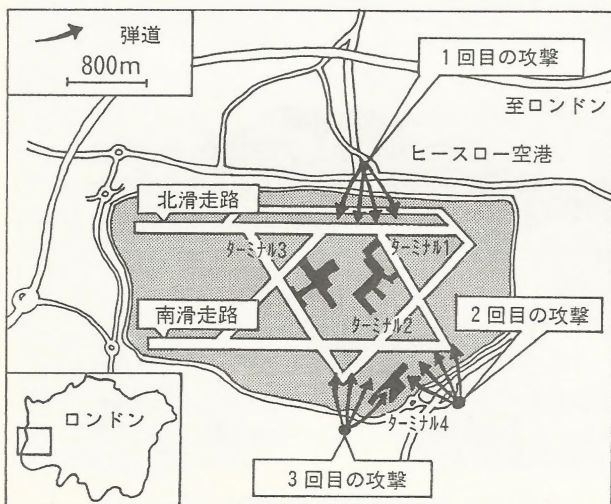
早期の警告があったにも関わらず、英政府ならびにM I 5と警察の上級役人どもは、滑走路の閉鎖やターミナルビルからの避難をうながすといった初期の緊急対応措置をとりはしなかったのである。それは、やっと3度目の迫撃砲攻撃が行なわれて、ヒースロー空港の閉鎖が余儀なくされ、乗客を安全な場所へ移し、代わりにスタンステッド空港を使用するという時になって、やっとなされたことであった。これにかかったコストは、フライトごとに1万ポンドとなる。

前日にチェックし終って何事もなかったはずの現場から、3度目の迫撃弾が発射されたことは、警察役人どもを困惑のどん底にたたき込んだ。この発射台は土を1メートル掘り出して設置されていた。そして、タッカー司令官はこう言ったのである。「我々は、捜索方法を再検討する必要がある。これは、緊急に考慮されねばならない問題である。別の攻撃はあり得ることなのだ」。

I R Aの声明は、3回の多重迫撃砲攻撃の分析と警告で結ばれている。

【1回目の攻撃】

3月9日、水曜日の夕刻、午後5時7分。報道機関に暗号警告の電話を入れた。56分になって、エクセルシオ・ホテルに置いた車から4発の迫撃弾が発射された。3発は北滑走路に着弾し、4つ目はタクシー乗場に着弾した。北滑走路は、最終的に25便が離陸した後に閉鎖され



た。

【2回目の攻撃】

3月10日、木曜の午後5時25分。報道機関に対して暗号警告が発せられた。空港は閉鎖されなかった。英国女王の着陸が予定されていたのは午後9時20分過ぎ。11日の金曜日午前0時7分、4発の迫撃弾が4番ターミナル近くに着弾した。内一つは、飛行機の待機場所の近くであった。南滑走路と周辺道路は閉鎖された。4番ターミナルは閉鎖され、立入り禁止措置がとられた。

【3回目の攻撃】

3月13日、日曜日の午前6時19分。報道機関に対して暗号化された警告が電話された。南滑走路は閉鎖されたが、当局者の命令によって、通関は8時に再開された。

IRA イースター声明

IRA総司令部は、すべての友人、そして活動に日々精尽されておられる方々に対し、時節の、友愛に満ちた挨拶を送るものであります。

リパブリカンにとって、イースター祭は、深い思慮と献身の念を新たに思いおこさせる祝祭である。ここに集いて我々は、アイルランドの自由のために生命を落とすこととなった人々に思い馳せねばならない。とりわけ、昨年亡くなった同胞には、より一層の思いがつのものである。またその家族、わけても義勇兵ジミー・ケリー、トーマス・ベクレイ両戦士のご遺族には、深い共感と連帯の思いを抱かずにはいられない。

我々の闘争は、長きにわたる闘いであり、誇りに満ち、かつ精力溢れるものであった。1916年の「イースター蜂起」から78周年を迎えるという重大な節目を祝い、祈念しつつ、我々は改めてアイルランドの自由のために自らを律し、リパブリカンたる信念の思いも新たに、ここに決意を誓う。

我々のめざすもの、すなわちアイルランド人民の民族自決権の承認と、その実際の発効は広く知られるところである。我々の意志と団結は、普遍に揺るぎなく、強固なものとなっている。

我々の、和平への決断もまた、公に広く知られ、記憶に留めおかれていることであろう。歓喜をもって迎えられた1993年10月の我々の「アイルランド和平案」は、ヒューム／アダムス会談にもとづき、原則を踏まえ大胆なものであった。今もって、これが和平達成の基本となりうることを、我々は信じて疑わない。

先日、真の和平プロセス達成のための我々の決意を、ねばり強く、忍耐をもって繰り返した。このプロセスに関係している者すべては、何らかの進展のために努力せねばならない、と述べた。この決意を共有する者が必ずや現れ出ることと信じている。もちろん、過去の経緯から、イギリス政府がこの範疇に入ることはないものと考ええる。

昨年、シン・フェイン党とイギリス政府間の会談設定

迫撃弾が着弾し、再び閉鎖された。3発の迫撃弾は飛行機の待機しているエプロンに着弾し、4番目は4番ターミナルビルの屋根に落ちた。

【警告！】

午後7時10分の暗号警告の後、ヒースローとガトウィック両空港は日曜日の夜、閉鎖された。両空港のフライトは停止した。ヒースロー空港は7時35分に、鉄道駅も併設されているガトウィック空港は、7時15分に閉じられた。イギリスの当局者どもは、今やIRAの警告を深刻に受けとめていることだろう。そして、IRAの暗号警告には直ちに対応せねばならないよう、厳しい政治的かつ大衆的な圧力をひしひしと感じていることだろう。

への努力を鑑み、我々は2週間にわたる一方的な停戦を英政府に宣言した。結果的に、英政府はこれを拒否し、先に設定された、和平へ向けたチャンスの扉を閉ざした。

我々は「3月13日声明」において、事態の進展を促すための、積極的かつ柔軟な意志と姿勢を、繰り返して表明した。

これを具体的に示すものとして、4月5日の火曜深夜から4月8日金曜深夜までの72時間にわたり攻撃的軍事行動を一方的に停止した。この一方的停戦の発効は無条件のものであり、英政府がイギリス、アイルランド両国の人々にとって、もっとも良い結果をもたらすために、このさらなる機会を有効に活用することを希望するものである。

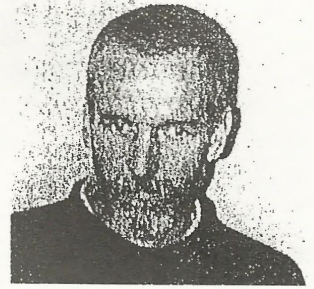
和平を達成することは、困難ではあるが、これはなんとしても乗り越えられねばならない。これはこのプロセスに関わる当事者すべてにとっての責任、とりわけ英政府の責任である。ここに提起された、このさらなる機会が、その目的と効力のもとに用いられんことを願うばかりである。

終わりに、我々リパブリカンは、このイースター復活祭を祝い、心に刻み、先に倒れた同胞から、その力と聖知を受け継ぎ、与えられた任務を執行し、立ち向かい、目的の統合と決意のうちに來たる年を前に、このチャンスに向き合い、取り組む所存である。



イースター行事にはIRA義勇兵士も参加した

マーク・ルディンへの獄中隔離攻撃 に対して世界各地で抗議行動



去る5月16日、世界各地のデンマークの代表機関（大使館、領事館、文化センターなどの施設）に対して、デンマークの政治囚マーク・ルディンの獄中処遇に抗議する行動が呼びかけられた。アウトノメ、反帝国主義グループによって取り組まれたこの行動は、獄中にあるマーク・ルディンの特別隔離処遇反対キャンペーンを強化するためになされた。

マーク・ルディンは、1945年スイスに生まれる。1979年まで、西ヨーロッパ各地に暮らし、革命闘争に身をおいてきた。リソグラフィー・アートの才能を政治運動に活かし、創作活動をおこなっていた。1979年、スイス国家による弾圧が迫ったため、スイスを脱出。1991年まで亡命者としてレバノンとシリアで暮らしていた。

ジハード・マンスールの名で多くの政治的なグラフィック作品を制作し、パレスチナ解放闘争や、政治的迫害で生まれ故郷を去らねばならない人々を描きつづけてきた。最近まで、PFLP発行の国際雑誌「民主パレスチナ」誌の表紙カバーを描くなどしていた。

1991年10月、彼はトルコ国境を越える際、逮捕され1年半にわたりトルコの監獄に収容され、のちデンマークへと移送される。デンマークでの容疑は、1988年11月コ

ペンハーゲンで起きた郵便局強盗の「第五の容疑者」というものであった。押収された1300万クローネは、パレスチナ抵抗闘争に充てられるものであった。一連の「裁判ショー」は、政治的に演出されたものであり、警察の「理論的主張」のみにもとづき、有罪判決が下された。

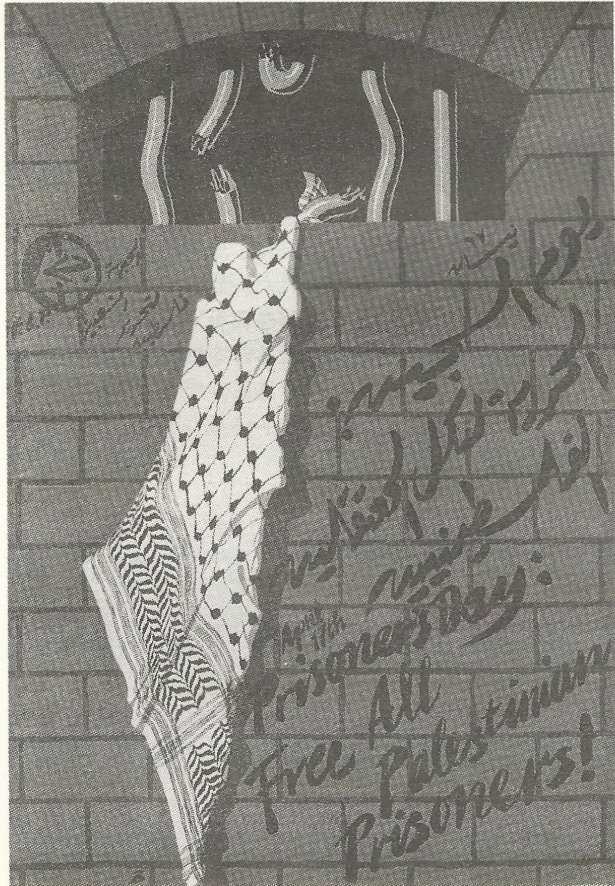
マーク・ルディンが、活動的な反帝国主義闘争に対する弾圧の生け贄として有罪となったのは明白である。

彼に対する、特別隔離拘禁処遇は、「社会民主主義者」の法務大臣の決定によってなされた。現在マーク・ルディンには、他の獄中者ととともに文化活動や身体体操したりすることが許されていない。また継続的、時には抜き打ち的に脱衣強制がなされている。持病に高血圧を患っているにもかかわらず、ジョギングなどの必要な身体体操などは許されず、医務官は投薬でこれを解決しようとしている。病状は日増しに悪化している。

1994年2月には、コペンハーゲンから地方のホルセンズ監獄へと移送された。仲間はコペンハーゲンに住んでいるので、事実上の面会妨害である。他の通信手段は遮断されている。

国家機関の弾圧によってもたらされた、このような組織的、肉体的、精神的な隔離拘禁は許されるものでない。今回の抗議行動では、以下の項目が要求されている。

- ★あらゆる独居房の即時撤廃
 - ★監獄当局による日常的いやがらせをやめよ！
 - ★マーク・ルディンをコペンハーゲンへと戻し、彼自身の選択のもとに他の政治囚、一般囚とともにつながりあえるようにすること。
 - ★ジョギングトレーニングを直ちに認め、監獄医務官ではなく、彼自身の選択で医師をつけられるようにすること！
- 以上／マーク・ルディン反弾圧委員会
◎隔離は拷問だ！ ◎監獄なき社会を！



パレスチナ政治囚釈放を求めるマーク・ルディンの作品

世界革命運動情報

BURST CITY
For Revolutionary Resistance

- ★発行 A. R. P
- ★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号 ARP
- ★FAX 075-781-1253
- ★定期購読料 10号分 3500円
- ★郵便振替口座
(新) 00920-0-252923 ARP
(旧) 大阪2-252923 ARP